

法人化第3回 (通算第10回 **Since 2007**)

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会

飼料用米多収日本一表彰式、

飼料用米普及のためのシンポジウム **2017**

<http://www.j-fra.or.jp/>

sympo20170317@j-fra.or.jp

2017年3月17日(金)

主催 一般社団法人 日本飼料用米振興協会

後援 農林水産省



法人化第3回（通算第10回 Since 2007）
飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
飼料用米多収日本一表彰式、
飼料用米普及のためのシンポジウム 2017

総合司会 若狭 良治（理事・事務局長）

プログラム	2
開催のご案内／開催要領	3
第一部 シンポジウム 開会 11:00～12:00（敬称略）	
主催者挨拶 一般社団法人日本飼料用米振興協会 理事長 海老澤 恵子	6
連帯の挨拶 日本生活協同組合連合会 総合運営本部 政策企画部長 小熊 竹彦	7
活動報告 「飼料用米における生産コスト低減技術の研究について」 東京農業大学農学部 助教〈農学博士〉 有澤 岳	8
事例報告 「飼料用米の保管手段の低コスト化研究報告」 太陽工業株式会社・物流システムカンパニーマーケティング室 室長 西村 哲	18
● 展示、試食、休憩（各自、自由行動） 12:00～12:50	
第二部 シンポジウム 開会 12:55～13:40	
基調講演 「水田のフル活用（仮題）」 農林水産省政策統括官穀物課 課長 川合 豊彦	32
基調講演 「飼料用米の利用推進について（仮題）」 農林水産省生産局畜産部飼料課 課長 富田 育稔	47
◆ 休憩・会場設営 13:40～13:55	
飼料用米多収日本一表彰事業 報告と表彰式 13:55～14:50	
日本飼料用米振興協会と農林水産省の共同開催です。	54
挨拶 一般社団法人日本飼料用米振興協会 理事長 海老澤 恵子	56
報告 農林水産副大臣 磯崎 洋輔	
表彰 農林水産大臣賞、政策統括官賞、全国農業協同組合中央会会長賞、 全国農業協同組合連合会会長賞、協同組合日本飼料工業会会長賞、 日本農業新聞賞 表彰状、副賞（盾）を各組織より授与いたします。	
受賞者 挨拶（有）平柳カントリー農産 代表取締役 我孫子 弘美	
◆ 休憩・会場設営 14:50～15:00	
第三部 シンポジウム 15:00～17:00	
特別講演 「飼料用米の生産から畜産への給与、製品の出荷作業」 株式会社秋川牧園 会長 秋川 実	64
活動報告 「生協における飼料用米利用畜産物の供給活動」 株式会社パル・ミート（パルシステム生活協同組合連合会）取締役商品本部長 江川 淳	82
研究報告 「飼料用米を利用したSGS生産と活用事例」 熊本県農業研究センター 畜産研究所 飼料研究室 室長 鶴田 勉	93
課題提起 「飼料メーカーから見た飼料用米普及のための課題」 昭和産業株式会社 飼料畜産部 担当 多田井 友揮	102
質疑応答 司会 信岡誠治 東京農業大学農学部畜産学科 教授〈農学博士〉	
閉会挨拶 「これからの日本の食糧自給率の向上と水田の活用、瑞穂の国の持続を望んで」 一般社団法人日本飼料用米振興協会 副理事長 加藤 好一 (生活クラブ事業連合生活協同組合連合会 会長)	112
案内パンフレット	113
奥付	114

開催：2017年（平成29年）3月17日（金） 開場 10:30～17:00 閉場
 会場：東京大学 弥生講堂（一条ホール）・（300名収容）

主 催：一般社団法人 日本飼料用米振興協会
 後 援：農林水産省

開催ご案内

一般社団法人 日本飼料用米振興協会（j-fra）は、「**飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会 飼料用米多収日本一表彰式、飼料用米普及のためのシンポジウム2017**」を開催します。

開催要領

開催日時：2017年3月17日（金）

10時30分開場、11時～17時にシンポジウムを開催します。

12時～12時50分の間、弥生講堂ロビーで資料展示、会議室で試食会を行う。

会 場：東京大学弥生講堂（一条ホール・会議室）（286名収容可能）。

東京都文京区弥生1-1-1 東大弥生キャンパス

参加費無料

ホームページ（<http://www.j-fra.or.jp/>）で参加者募集を行いました。

なお、展示・試食は昼休憩時間（12時～12時50分）を利用しますので、参加者は事前におにぎりやサンドイッチなどの軽食を用意しておいてほしいと主催者としては希望します。但し、ホールでは食事ができませんのでご承知おきください。

試食では飼料用米育ちの豚肉のしゃぶしゃぶ、ゆで卵、肉製品を用意しています。

メインテーマ

飼料用米の50万トン弱の生産になったことを踏まえ、次の通りです。

〈目的〉

食料自給率の向上を目指し、耕（作）畜（産）消（費）の連携を実現しますことで、国産飼料用米による給餌を推進することにより、コメ育ちの畜産物（牛肉・牛乳・豚肉・鶏肉・鶏卵 およびその派生商品）のブランド化及びその流通、消費を促進するための事例紹介を通じて、課題を明らかにして改善を図ることにより飼料用米の振興を目指す。

〈概要〉

日本飼料用米振興協会が主催している農業・畜産関連団体、流通事業者、流通・購入消費に関わる団体、個人及び研究者による普及交流集会「飼料用米普及のためのシンポジウム2017」と、日本飼料用米振興協会及び農林水産省が共同実施している「飼料用米多収日本一表彰事業」を合同で開催実施します

〈経緯〉

本協会は、2008年（平成20年）に穀物価格が高騰したいわゆる「畜産・大パニック！」の際に、国内の畜産農業を守り、食糧自給率の向上などを目的に開催された「学習会」を起点に組織された「超多収穫米普及連絡会」が原点。

その後、飼料用米の普及や、日本型循環畜産と農業、流通、消費の連携などを目指して活動してきた7年間の活動実績を踏まえて、2014年（平成26年）4月にさらなる推進のため、組織の一般社団法人化を実現した。

一昨年（2015年3月20日）、法人化第1回（通算8回目）の「シンポジウム2015」。

昨年（2016年3月11日）、法人化第2回（通算9回目）の「シンポジウム2016」。

今年（2017年3月17日）、法人化第3回（通算10回記念）「飼料用米多収日本一表彰、シンポジウム2017」を開催します。

従来推進してきた「飼料用米の利点」（給与された家畜（鶏卵、鶏肉、牛肉、牛乳、豚肉製品の食味の改善など）の成果を強調し、普及促進をしてきましたが、国内外の様々な経済的変動、畜産・農業環境の大きな変化を背景に、食料自給率の向上が大きな課題となってきたことを受けて、食料自給率を巡る話題や特に米国における農産物に対する助成金の実態など国際的な農産物の安全保障上の問題点を掘り下げてきています。

今年のシンポジウムの特徴点

（五部構成）

今年、2016年のシンポジウムの内容は、日本一表彰式との合同開催ということもあり、全体をシンポジウム三部と展示・試食会、表彰式の五部構成となっています。

第一部は、当協会の取り組みの紹介をテーマとしています。

展示・試食会

第二部は、基調講演として、農林水産省の報告を組みました。

第二部と第三部の間に次の表彰式を実施します。

飼料用米多収日本一表彰式

第三部では、飼料用米の普及事業の様々な事例や課題を紹介します。

（内容紹介）

第一部

シンポジウムでの展示をきっかけに、テントメーカーである太陽工業㈱と東京農業大学による籾米による簡易保管実験実証研究を2年間にわたり実施してきました。当協会はこの実験をサポートしてきました。今年のシンポジウムではこの実績を踏まえ、太陽工業㈱による報告をいたします。

日本飼料用米振興協会は、東京農業大学、全国農業協同組合連合会と「飼料用多収穫米の栽培に関する研究」契約を締結し、新品種「オオナリ」の栽培試験に取り組みました。今回のシンポジウムではこの成果を基に、東京農業大学の栽培面での低コスト研究についての報告をいたします。

展示・試食会

消費者組織であるパルシステム生活協同組合連合会の食肉加工場である株式会社パル・ミートによる資料展示・しゃぶしゃぶの試食を用意しています。

東京農業大学による飼料用米を給与した鶏卵のゆで卵を試食していただきます。

東京農業大学による飼料用米に対する取り組みの資料展示をいたします。

太陽工業株式会社の「屋外保管用防水フレキシブルコンテナ」などの資料展示を行います。

熊本県などと飼料用米のホールサイレージ研究開発を推進しているヤンマーアグリ設備等に関する資料展示をしてもらいます。

現在、更に展示資料、試食品を集約しています。

第二部

日本における食料自給力の向上を目指す立場から主食用米および飼料用米の生産から普及への政策について農林水産省政策統括官穀物課および生産局畜産部飼料課による推進政策を基調講演としてお願いしました。

飼料用米多収日本一表彰式（成果報告と表彰式）

昨年、一般社団法人日本飼料用米振興協会と農林水産省は、初めて全国の農業生産者を対象とした「飼料用米多収日本一表彰事業」を発足させました。

多収生産の日本一を競う公募に応募された農業従事者は448件ありました。その成果を今年1月末に集約し、審査委員会による厳正な審査を得て表彰事業者を選定します。

本事業の成果と表彰者の紹介、表彰式を実施します。表彰者のご挨拶を予定しています。

第三部

第三部では、主食用米から飼料用米までを生産し、畜産への給与を実施し、製品まで事業を展開している山口県の秋川牧園の特に保管給与のシステムについて特別報告をいただきます。

熊本県を中心として、ヤンマーアグリなどの研究開発集団を組織し、様々な研究を行っています。その中でも飼料用米のホールサイレージなどの利用促進を図る取り組みを紹介します。昨年に引き続き、より具体的な事業展開の可能性を報告していただきます。

消費者組織であるパルシステム生活協同組合連合会の食肉供給事業を通じ、料用米の実際の取り組みを報告していただきます。飼料用米給与の鶏肉や鶏卵の取り組みも併せて報告していただきます。

多くの飼料用米が収穫されるようになった前進面と同時に、実際に畜産事業者が利用する配合飼料を生産する事業者にとって、現在の飼料用米の流通は決して恵まれた環境にはないのが現状です。

生産者から飼料用米の生産予約、集約、物流、保管、配合作業などの飼料集約事業者（昭和産業株式会社）から見た改善すべき課題などを実際の業務関わっている立場から改善課題を提言していただきます。

以上の様々な研究や事業、消費に至る飼料用米の一貫した取り組みを様々な取り組みを理解していただく「集い」として企画しました。多くの消費者、主婦をはじめ、配合飼料メーカー、物流事業者、保管事業者、農業協同組合、農事法人、農家、研究者、学生などの方々ご理解しやすい日本における水田のフル活用、飼料用米の利活用について皆様と考え、交流する場として運営いたします。

シンポジウム会場で講演・報告者の資料を配布します。事前作成のため、当日変更します部分が発生しますが、最終発表資料は、終了後、直ちに最終報告資料としてホームページでPDFを掲示します。

意見交流会、懇親会の開催

シンポジウム終了後、東京大学消費生協の農学部食堂で希望者による交流懇親会を開催します。

17:30 から有料で3,500 円。ホームページで事前募集していますが、当日の参加も受け付けますので、ご遠慮なくご相談ください。当日の受付でご希望を承ります。シンポジウム終了時にもご確認します。

なお、意見交流懇親会を積極的に取材していただきたいと、事務局では、出席者の生の声を聴いていただきたく、報道関係者の方のご参加を呼びかけます。

取材のため飲食等ができないということで、参加費無料としておりますので、参加者申込書に報道と記載いただければ幸いです。

飼料用米普及のためのシンポジウム2017

主 催 : 一般社団法人 日本飼料用米振興協会

正 会 員 : 生活クラブ事業連合生活協同組合連合会
全国農業協同組合連合会
木徳神糧株式会社
昭和産業株式会社
株式会社秋川牧園
シンジェンタ・ジャパン株式会社
中国工業株式会社
中野区消費者団体連絡会
NPO未来舎

賛助会員 : 日本生活協同組合連合会
生活協同組合おかやまコープ
庄内みどり農業協同組合、
栃木県開拓農業協同組合
株式会社平田牧場
JA加美よつば農業協同組合、
滋賀県飼料米利活用推進協議会
太陽工業株式会社

協賛団体 : 東都生活協同組合
株式会社パルミート

飼料用米多収日本一表彰事業

主 催 : 一般社団法人日本飼料用米振興協会
農林水産省
後 援 : 全国農業協同組合中央会（全中）
全国農業協同組合連合会（全農）
協同組合日本飼料工業会



飼料用米多収日本一表彰式

(敬称略)

ご挨拶

一般社団法人日本飼料用米振興協会 理事長 海老澤 恵子
農林水産副大臣 磯崎 洋輔

表 彰（授与者）

農林水産大臣賞	農林水産副大臣 磯崎 洋輔
政策統括官賞	農林水産省政策統括官 柄澤 彰
全国農業協同組合中央会会長賞	全国農業用協同組合中央会 常務理事 金井 健
全国農業協同組合連合会会長賞	全国農業協同組合連合会 常務理事 岩城 晴哉
協同組合日本飼料工業会会長賞	協同組合日本飼料工業会 専務理事 鹿間 千尋
日本農業新聞賞	日本農業新聞 営農生活部長 堀越 智子

受賞者挨拶

有限会社 平柳カントリー農産 代表取締役 我孫子 弘美
司 会 農林水産省政策統括官穀物課 課長補佐 小口 悠

ご挨拶

一般社団法人日本飼料用米振興協会
海老澤恵子

（一社）日本飼料用米振興協会では、飼料用米の普及のために毎年このようなシンポジウムを開催して参りましたが、今年は同時に「飼料用米多収日本一」の表彰式を行うことが出来、大変嬉しく思っております。

一昨年から農水省とこの事業について協議を重ねてまいりました。当協会の理事会・総会で審議の結果、まさに私共の協会が目指す飼料用米の普及の目的に合致した事業と考え、農水省との共同事業として実施することを決議しました。

ご賛同くださった4つの団体（全国農業協同組合中央会、全国農業協同組合連合会、協同組合日本飼料工業会、日本農業新聞）からの4賞と、農林水産大臣賞、政策統括官賞と合わせて合計6賞、それぞれ単位収量の部と、地域平均の増収の部に分けて12の賞で表彰することになりました。

いうまでもなく、飼料用米にとって重要なことは、できるだけ手をかけずに、低コストで安全なお米がいかに沢山収穫できるかということです。

低コストにするためには、面積当たりの収量をできるだけ多くすることです。

昨年5月にコンテストの募集を開始し、6月に応募を締め切り、年明けて1月末に28年産の確定収量を報告頂き、2月に審査会を行いました。

全国から448の応募をいただき、各地でそれぞれ工夫を凝らした意欲的な取り組みがされていることが分かりました。

輸入飼料に頼らず、国産のお米で日本の畜産が賄えるようになるためには、まだまだ、耕、畜、消の全体の理解と協力、そして連携が必要です。

本日受賞された生産者の皆さまの取り組みが、模範となってこれからの飼料用米生産の目標となり、励みとなってさらに生産が増えますように、そして私たち消費者も含めた日本全体が飼料用米の重要性について知り、広めることができれば、とても意義あることと思います。

受賞された皆さま、本日は誠におめでとうございます。

そして、ご参集下さいました皆さま、ありがとうございました。

（１）単位収量の部

褒賞	受賞者	ブロック名	都道府県
農林水産大臣賞	有限会社 平柳カントリー農産 代表取締役社長 我孫子 弘美	東北	宮城県
政策統括官賞	新山 実	東北	秋田県
全国農業協同組合中央会会長賞	三日市営農組合 組合長 荒木 嗣正	北陸	富山県
全国農業協同組合連合会会長賞	佐々木 隆	東北	山形県
協同組合日本飼料工業会会長賞	原田 芳和	九州	宮崎県
日本農業新聞賞	地崎 啓	北陸	富山県

（２）地域の平均単収からの増収の部

褒賞	受賞者	ブロック名	都道府県
農林水産大臣賞	有限会社 平柳カントリー農産 代表取締役社長 我孫子 弘美	東北	宮城県
政策統括官賞	原田 芳和	九州	宮崎県
全国農業協同組合中央会会長賞	地崎 啓	北陸	富山県
全国農業協同組合連合会会長賞	新山 実	東北	秋田県
協同組合日本飼料工業会会長賞	三日市営農組合 組合長 荒木 嗣正	北陸	富山県
日本農業新聞賞	山田 奈々	近畿	滋賀県



副賞（盾：光学ガラス、台：御影石）

【単位収量の部】

農林水産大臣賞	1 有限会社 平柳カントリー農産（宮城県）
政策統括官賞	2 新山 実（秋田県）
全国農業協同組合中央会会長賞	3 三日市営農組合（富山県）
全国農業協同組合連合会会長賞	4 佐々木 隆（山形県）
協同組合日本飼料工業会会長賞	5 原田 芳和（宮崎県）
日本農業新聞賞	6 地崎 啓（富山県）

【地域の平均単収からの増収の部】

農林水産大臣賞	1 有限会社 平柳カントリー農産（宮城県）
政策統括官賞	5 原田 芳和（宮崎県）
全国農業協同組合中央会会長賞	6 地崎 啓（富山県）
全国農業協同組合連合会会長賞	2 新山 実（秋田県）
協同組合日本飼料工業会会長賞	3 三日市営農組合（富山県）
日本農業新聞賞	7 山田 奈々（滋賀県）

1 ひらやなぎ のうさん 有限会社 平柳カントリー農産（宮城県加美郡加美町）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
夢あおば	約2.3ha	932kg/10a	387kg/10a(545kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 昭和50年に平柳営農集団組合を設立させ、地域の7戸の農家で当法人を平成15年に設立。
- 耕種作物のほか、きのこ(えのきだけ)を栽培 あひこひろみ
- 代表取締役社長: 我孫子 弘美
- 構成員[H28]: 7名(雇用12名)

【作付品目】

- ・主食用米: ひとめぼれ、金のいぶき等 計5品種 18.3ha
- ・飼料用米: 夢あおば 2.3ha
- ・大豆: ミヤギシロメ 18.8ha
- ・種子用: 夢あおば、東北211号 4.2ha
- ※えのきだけを年間510トン栽培



佐々木専務 我孫子社長



【取組のきっかけ】

- 大豆作後の稲の倒伏対策として、平成20年から飼料用米(夢あおば)に取り組む。

【取組概要】

- 大豆作後に飼料用米を作付け、土壌窒素を有効活用。また、牛ふん堆肥(2t/10a)とえのきだけ栽培で発生する廃培土を原料とした堆肥(1t/10a)を施用し、化学合成肥料の使用量を低減。
- 疎植栽培(慣行70株/坪⇒50株/坪)で育苗箱を慣行の30枚/10aから18枚/10aに削減。
- 元肥は、移植時に窒素1.2～1.5kg/10aを側条施肥。追肥はしていない。
- 中干し(6月下旬～7月中旬)完了2日後に溝切りを実施し、用水・排水を円滑化。
- 通水期間の最後(9月中旬)に湛水し、止水することで品種が本来必要な登熟期間を確保し未熟粒発生を低減。
- バラ集荷に対応しているJA加美よつばの飼料用米専用のカントリーエレベーターに乾燥を委託し、全量を2tダンプによるバラ輸送とすることで、包装資材費及び労働費を削減。

2 にいやま みのる 新山 実(秋田県横手市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
秋田63号	約2.5ha	897kg/10a	284kg/10a(613kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族3人(本人、妻、息子)で経営する専業農家。
- 大豆を中心とした複合経営
- 近隣の8農家で「ニツ橋ライスセンター」を設立し、共同で乾燥調製

【作付品目】

- ・主食用米:あきたこまち、萌みのり 4.1ha
 - ・飼料用米:秋田63号 2.5ha
 - ・大豆:リュウホウ 11.5ha
 - ・小麦+そば(後作) 5.1ha
- ※水稲、大豆、そばの3年4作の輪作体系



【取組のきっかけ】

- 米価が下落傾向の中、面積拡大に対応した作業体系の確立と経営の安定化を図るため、飼料用米の数量払いが導入されたことを契機に平成26年から多収品種(秋田63号)により飼料用米に取り組む。



【取組概要】

- 耐倒伏性に優れ、いもち病にも強く、作期が晩生である多収品種の秋田63号を導入し、主食用米(あきたこまち)との作期を分散。
- 栽植密度は、疎植栽培(株間を広げて栽植密度を下げる)により、慣行の70株/坪から50株/坪に減らし、播種から田植えまでの資材費及び労働費を低減。
- 追肥は、穂数増加を目的として、窒素成分を多く含んだ肥料の中でも比較的安価な肥料(20kg袋あたり、N4.6kg、K4.6kg)を7月15日と7月25日にそれぞれ6kg/10a施用。
- 一台の汎用コンバインで、自らが生産する米、大豆、麦及びそばの収穫を行い、農機具費を低減。
- 乾燥・調製後は、全てフレキシブルコンテナで、自らJA秋田ふるさとへ全量出荷。包装容器代や運搬経費を節減。

3 みっかいち 三日市営農組合(富山県高岡市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
やまだわら	約4.2ha	865kg/10a	273kg/10a(592kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 高岡市福岡町三日市地区の6戸からなる集落営農組織として平成8年度に設立。
あらき つぐまさ
- 組合長:荒木 嗣正
- 構成員[H28]:6名

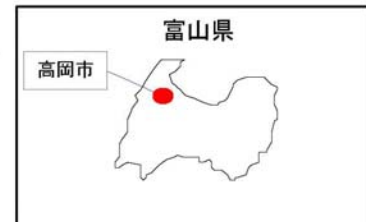
【作付品目】

- ・主食用米:コシヒカリ 10.3ha
- ・飼料用米:やまだわら 4.2ha



【取組のきっかけ】

- 大豆の低単収が課題となっていたことや、地域JAからの勧めがあったことから、平成27年から一部、大豆に代えて飼料用米を作付け。主食用米と同じ機械装備で生産できることや、収量も良かった(27年産:790kg/10a)ことから、28年は本格的に飼料用米に取り組んでいる。



【取組概要】

- 肥培管理は、主食用米(コシヒカリ)と同様に基肥として肥効調節型肥料(20kg袋あたりN4.2kg、P2.8kg、K2.8kg)を40kg/10a施用し、稲体診断(葉色、草丈等)による適期の追肥(硫酸7kg/10a(出穂前))、適切な病害虫防除及び水管理等により高収量を確保。(27年産:790kg/10a、28年産:865kg/10a)。
- 当該地区は、地力の低い地帯であることから、土づくりとして毎年、鶏糞堆肥及びケイカル(ケイ酸資材)を、慣行の施用量の1.5倍(150kg/10a(3月下旬～4月上旬))施用。
- 「やまだわら」が、漏生イネとして主食用米に混入することを防止するため、飼料用米は固定して作付け。
- ほ場の水管理
入水(代掻き(4月下旬))→湛水管理(田植期(5月上～中旬))→中干し(6月中～下旬)→間断かん水→飽水・湛水管理(幼穂形成期～登熟期)→落水(9月中旬)→収穫(10月上旬)

4 ささき たかし 佐々木 隆(山形県酒田市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ふくひびき	約1.0ha	869kg/10a	239kg/10a(630kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 平成19年に集落営農組織として設立された東平田ファーム(構成員169名)の構成員となり、組織に委託された農地の一部を農業機械オペレーター等として肥培管理を実施。

【作付品目】

- ・主食用米:(はえぬき、つや姫、ひとめぼれ) 3.5ha
- ・飼料用米:ふくひびき 1.0ha
- ・加工用米:はえぬき ひとめぼれ 1.0ha
- ・米粉用米:はえぬき 0.2ha
- ・大豆:エンレイ 0.1ha



【取組のきっかけ】

- 地元JAが、生協や畜産農家等と連携して飼料用米の生産・利用に取り組んでおり、多収品種「ふくひびき」での飼料用米の作付けを推進。JAの勧めに応じて平成27年から飼料用米に取り組む。



【取組概要】

- 上位3葉の葉長の計が1m以内であれば、太陽光を地面まで届かせることができ、稲の根張りがよく、整粒もみ数の増加(登熟歩合の上昇)が見込めるというこれまでの研究及び経験から、土壌分析データ等を基に基肥の施肥量を調整(10aあたり投入量、N6kg、P6kg、K6kg)。
- 追肥は、尿素の単肥を使用することで費用を抑え、4kg/10aの施用量を基本として、上記の葉長の管理など生育状況に合わせて施肥量を調整。
- ほ場は大豆の後作であり均平となっていなかったが、除草剤の効果を確実なものとするため作付前にトラクターダンプで土を移動し、田植え前に追加で代掻きを行うことで、念入りに均平化を図り、除草剤は田植え後の1回のみで確実に効かせることができた。また、殺虫剤・殺菌剤についても、慣行栽培では合計4回散布のところを2回に低減。

5 はらだ よしかず 原田 芳和(宮崎県えびの市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ミズホチカラ、ホシアオバ、北陸193号	約1.0ha	890kg/10a	330kg/10a(560kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻、子2人) 農繁期に期間雇用延べ5名
- 収穫作業(10ha)、乾燥・梱包作業(120t)を受託

【作付品目】

- ・主食用米:ヒノヒカリ 10ha
- ・飼料用米:ミズホチカラ等 1ha
- ・加工用米:み系358 2ha
- ※冬作としてイタリアンライグラス2haも栽培



【取組のきっかけ】

- 飼料用米を地域内で生産・利用する循環型サイクルの構築が重要と考え、平成27年から取り組む。



【取組概要】

- 多収を実現するため、特に土づくりに力を入れ、栽培ほ場に豚糞堆肥2～3t/10aを散布。堆肥は、循環型サイクルの一環として、えびの市内の畜産農家からあえて有償で商品(堆肥)として購入(約2,000円/t)することで、良質な堆肥生産と継続的な耕畜連携を実現。
- 化成肥料による基肥(10aあたりN8.4kg、P8.4kg、K8.4kg)と、追肥(10aあたりN2.8kg、P2.8kg、K2.8kg)2回(穂肥(8月)、実肥(9月下旬))を行うことで、多収を実現。
- いもち病抵抗性の品種特性を活かして、防除回数を地域慣行より2回減らし、地域慣行と比べ農薬費約4割削減(実証ほ場の成果)。
- 作期の異なる品種の作付けで、田植えや収穫等の作業を分散。その際、飼料用米は主食用米より先に移植し、最後に収穫することで、品種特性を踏まえた生育期間を確保し、多収を実現。

6 ちさき けい 地崎 啓(富山県高岡市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
やまだわら	約2.1ha	882kg/10a	290kg/10a(592kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(常勤:本人、農繁期の期間雇用(両親、姉))

【作付品目】

- ・主食用米:コシヒカリ、てんこもり、とみちから 13.0ha
- ・飼料用米:やまだわら 2.1ha
- ・大豆:エンレイ 5.5ha
- ・大麦:ファイバースノウ 2.0ha



【取組のきっかけ】

- 2年3作体系(水稻一大麦一大豆)を基本としていたが、山際のほ場は重粘土のため排水性が悪く、大麦や大豆の栽培には不利であった。このため、平成28年から排水条件の悪い山際のほ場を中心に飼料用米(やまだわら)に取り組む。



【取組概要】

- 大豆後作のほ場では、土中窒素成分が多くなることから、他のほ場の主食用米及び飼料用米に比べて基肥(20kg袋あたりN4.2kg、P2.8kg、K2.8kg、肥効調節型肥料)を2割削減(21kg/10a⇒17kg/10a)。
- 除草剤は、主食用米の慣行栽培より1回減らし、初期・中期除草剤田植え同時処理のみとしている。
- 生産コスト低減に取り組む一方で、飼料用米であっても良質なものを生産したいとの強い意志から、主食用米と同様に土壌改良資材として発酵鶏糞(100kg/10a(3月下旬～4月上旬))の施用、稲体診断(葉色、草丈等)による適期の追肥(硫酸10kg/10aを2回に分けて施用(出穂前))、適切な病害虫防除及び水管理等により高収量と同時に品質を確保。
- ほ場の水管理
入水(代掻き(4月下旬))→湛水管理(田植期(5月上～中旬))→中干し(6月中～下旬)→間断かん水→飽水・湛水管理(幼穂形成期～登熟期)→落水(9月中旬)→収穫(10月上旬)

7 やまだ なな 山田 奈々(滋賀県東近江市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
北陸193号	約2.4ha	823kg/10a	272kg/10a(551kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族4人(本人、夫、両親)で農業を営む兼業農家。
- 水稻専作で、経営面積約5ha

【作付品目】

- ・主食用米:夢ごこち、滋賀羽二重糯 2.5ha
- ・飼料用米:北陸193号 2.4ha



【取組のきっかけ】

- 小規模集落で離農者が増える中、不作付地解消及び収益増加のため、借地を含む農地において、平成26年産から主食用品種(日本晴)で飼料用米に取り組む。
- 平成27年産から、出荷先の商系事業者(米・資材卸)の薦めもあり、倒伏に強く、多収である北陸193号の栽培に取り組む。



【取組概要】

- 北陸193号は主食用米より早く定植し、主食用より遅く収穫することで、品種特性を踏まえた十分な生育期間を確保し未熟粒を減らして収量を増加。
- 施肥は元肥として窒素分30%の緩効性肥料を田植と同時(5月3～5日)に53～55kg/10a施用し、幼穂形成期の少し前(7月13～16日)に追肥することで株の根張りを向上。追肥の施肥量は、過去の施肥量と収穫状況を分析・参考とし、ほ場ごとに調整のうえ、安価な単肥(硫酸)をほ場ごとに5～15kg/10a施用。
- 6月中旬に確実な水切り作業を行い、最高分けつ期の直前に十分な落水を行い、倒伏防止及び根の活性化を図った。
- 育苗は簡易水槽を使い、プール育苗を行うことで、労働時間を低減。
- 防除は省力化のため、育苗箱施用と除草剤の田植7日後散布の2回に削減。
- 収穫後1週間以内にもみがらを散布し、わらと併せてすき込み、12月末までに再度のすき込みを行うことで良質な土づくりを実施。